

めあてを追求する場の構成

— 4年 「ごんぎつね」 —

丸 本 克 巳

1. 研究の視点

学習課題は、指導目標と密接に関連し、子どもたちの力では設定しにくい。指導のねらいを子ども意識に変換し、子どもたち自身のことばで表現させたものが「学習のめあて」である。めあては、指導目標にそったものが望ましいが、子どもの実態によりそうならないことがある。教師は、子どもの興味・関心を誘発できる場を構成し、ねらいに即しためあてを設定させなければならない。作品と対面し、問題意識や矛盾を持つ場合、自己の読みは、これまでの生活経験・学習経験がもとになっていることが多い。そこで、個々の読みの根拠を表現に求めるならば、「自分の考えは、この表現をこのように解釈したためである。」という自己の読みを提示するであろう。ひとり読みで自己の読みの根拠を求め、他の読みとの違いを意識すれば、確かめ読みを行い、読みの確認あるいは修正を行わねばならない。このことは、作品の読み深めへとつながっていく。ひとりのめあてと共通のめあては、指導のねらいにそったものとは、ずれたものが含まれている。読み進めながら修正を加え、新たにめあてを作ることで、初めに設定しためあてをふり返ることができる。めあての反省は、価値あるめあて作りのし方を学ばせることになる。

この考えに立ち、ごんぎつねの指導を述べていく。

2 実践の概要

(1) 題材について

一人ぼっちのいたずらぎつねごんは、兵十の母の死を知り、自分のいたずらを後悔する。つぐないのため、いわしを投げこんだり、くり・まつたけを毎日のように兵十の家へ運んだりするが、兵十には分かってもらえず、火縄銃で打たれてしまう。相手の心を思いやり、ひたむきにつぐないの行為をとり続けるが、善意は伝わらない。死を目前にして、やっと善意が通じるが、永久に分かり合うことができなくなってしまう。

この期の児童は、人の気持ちを理解し、物事を客観的に見ることができるようになってくる。人と人の心が通じ合い、内面的に深まりのある作品から多くの事を学ぶ姿勢が育ってくる。このような時期に、「ごんぎつね」を学習することは、人間の内面を深く考える上で意義深い。

この作品は、21ページに及ぶ（学図）長文であるが、物語的展開に優れ、描写が生き生きしているので読みやすい。登場人物の心情表現が豊かで、行動や気持ちの移り変わりを考えながら読むのに適している。

(2) 指導のねらい

- ◎人物の行動や気持ち、場面の情景を思い描きながら、物語を読み味わわせる。
- 場面と場面のつながりを考えながら、その展開のあらましをつかませる。
- 場面ごとに、人物と人物との関わりをとらえ、その行動や心情の移り変わりを読み取らせる。
- 物語の中心を読み取り、感想をまとめることができるようにする。
- 情景や人物の気持ちが分かるように音読ができるようにする。

(3) 指導計画（15時間扱い）

次 ④	過 程	指 導 内 容
一 ③	◦全文を通読し、学習のめあてをつかむ。	◦範読を聞き、感想を持つ。 ◦自他の感想を比較し、学習のめあてを作る。

二 ③	<ul style="list-style-type: none"> ○ひとり調べ，ひとり読みをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ごんと兵十を中心に，行動や気持ちを表現に即して読み取る。 ○めあてについて，自分の読みをする。
三 ⑥	<ul style="list-style-type: none"> ○人物の行動や気持ちの移り変わりを考えながら読む。 ○学習のめあてを解決する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習のめあてを解決しながら読み深める。 (1)ごんの境遇といたずらへ走るごん的心情，うなぎのいたずら (2)ごんの変革の契機 (3)ごんの償い (4)兵十と加助の会話 (5)引き合わないと嘆くごん (6)ごんを打った兵十 ○自分の解釈の根拠を表現に見い出す。
四③	<ul style="list-style-type: none"> ○読後の感想を話し合う。 ○めあての見直しをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○登場人物の気持ちの変化と自分の考えを，根拠を明らかにして表現する。 ○読みの深まりとめあての位置付けを関連さす。

(4) 指導の実際

①教材との出会い

教師の範読を聞き，一次感想を書く。ごんや兵十について感じたこと，その他で思ったことを書く。

- ・ごんは，辺りの村へ行っていたずらばかりしてそうとうないたずらぎつねなんだなと思った。ごんは，自分のせいで兵十のおかあさんが死んだのかと思ってつぐないをしたのがよかった。でも兵十がかんちがいをしてうったときは，とてもかわいそうでした。兵十は，ほんとうにおかあさんのために，うなぎをとりにきたのかな。
- ・いたずらするのはいけないけど，とってもやさしいきつねだと思います。どうしていたずらをするのかな？と思いました。そして，そのわけがわかりました。一人ぼっちでさびしいんじゃないか，と思います。
- ・お母さんが死んでしまって，兵十もごんと同じ一人ぼっちになったので，一人ぼっちの気持ちがわかったと思います。
- ・兵十が，せっかくつかまえた魚を，ごんがにがした時，とてもくやしかったと思います。そして，うったのは，いつもいたずらをしているから，そのしかえしだと思います。
- ・お母さん思いのやさしい人だと思います。最後でごんをうったのは，もうがまんできなくなつてうったんだろうな。
- ・うなぎをぬすまれて，おっかあが死んでしまった。その次の日から，まつたけやくりをだれかがくれる。そのだれかがごんということを知らないので，じゅうで殺した。ごんがくりやまつたけをくれたことを知って，殺すんじゃないかった，と思っただろうな。
- ・ごんは，兵十のお母さんが食べたいと言っていたにちがいないと言ったが，兵十はなぜまたうなぎをさがさなかったのだろう。
- ・加助は，兵十の友達（しりあい）で，すぐそうだんにのってくれるやさしい人。神様をそんけいしている人。

② 感想の比較

一次感想を類型化し，プリントする。自他の感想を比べる。対立・同調・思い直しなど，一人ひとりの読みの根拠が問われる。

鋭い読みや誤った読みがある。断片的で読み落としがあるから、確かめてみようという気持ちをしていさせることができる。

③ ひとりのめあて

感想の比較から、自分自身が読み深めたいことを焦り、自分のめあてを作る。めあてカードに記入させる。

④ 共通のめあて

各自のめあてを類型化し、プリントする。主なものをまとめると次のようになる。

- | | |
|---------------------|--|
| ごんに関するもの | 兵十に関するもの |
| ・ごんは、どんなきつねだろう。 | ・うなぎをとられた時の気持ちはどうだったか。 |
| ・なぜ、いたずらをするのだろう。 | ・くりやまつたけを、ごんが持ってきたのを知っていたら、兵十はどうしただろう。 |
| ・うなぎのいたずらをしたのは、なぜか。 | ・なぜ、ごんをうったのか。 |
| ・うたれた時の気持ちは？ | ・くり気づいた時の兵十の気持ちはどうか。 |
| ・そのまま死んだのか。 | |

教師のねらいは、「人物の行動や気持ちの移り変わりを考えながら読もう」に示されているが、児童にとっては抽象的でわかりにくい。一人ひとりの疑問・興味・関心が、児童自身の言葉で

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	場面
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	阿部
																						泉
																						井上
																						白田
																						岡川
																						実川
																						白田
																						中川
																						手川
																						中西
																						長谷
																						正守
																						松浦
																						島上
																						三谷
																						湯田
																						吉安
																						達藤
																						木志
																						本本
																						谷田
																						川口
																						河野
																						河木
																						佐々
																						木々
																						々々
																						木広
																						寺越
																						戸村
																						垣本
																						元
																						頭
																						田

ごんきつね
① 初めての感想
● 学習したいこと

表現されるとほとんど一場面に限られる。話のすじに従って並べかえると、ほとんどの場面はカバーされる。これらは、くわしく読めばわかる問題と想像しなければわからないものとに大別できる。全体を通じての共通のめあては、なぜ、ごんはいたずらをするのかと、なぜ、兵十はごんを打ったのかをとくために人物の行動や気持ちを読み取るのである。一人のめあては、

- ① 物語の発端
- ② うなぎのいたずら
- ③ おっかあのそうしき
- ④ つぐないをするごん (つぐないを恩がえしとまちがえる子が4名いる)
- ⑤ 加助との会話
- ⑥ うたれたごん

の場面をくわしく読みながら解決することにした。

初めの反応の箇所と学習したいことは、前ページの表1の通りである。

⑤ ひとり調べ・ひとり読み

ごんと兵十の行動や気持ちを表現してある所を書き出す。ごんの行動や考え方が変わったのはどこか、何がきっかけでそうなったのか。兵十についてはどうか。その他の登場人物とどうかかわっているか。自分の力でひとり調べを進めていく。個人差があるので、早く済んだ子は、別室で音読をさせた。

⑥ 場面ごとの読み深め

ひとり調べをもとに、場面ごとに読み深める。個の読みを分類して提示する。自分の読みにこだわりを持たせ、解釈の根拠を文章の中に求めさせる。

ここで、学習の流れを、S子とO男でみる。

S子の学習

⑦ 初めの感想

ごん	いつもいたずらばかりしているが、本当はやさしいのだな。	兵十	ごんを火なわじゅうでうった時、あんなことしなけりゃよかったと思います。
----	-----------------------------	----	-------------------------------------

① 自分のめあて

ごんは、本当はやさしいきつねなのに、どうしていたずらばかりしていたのだろう？

② ひとり調べ・ひとり読み

場面	ページ	ごん	兵十
ごん	P65	△一番太いうなぎをつかみにかかたときぬるぬるしていたのでうなぎの頭を口にくわえたらうなぎはキョーといいてごんの首へまきついた。そのとたん兵十が「ぬすむなめめ」といってうけ人命にけつていった。	
ごん	P64	△びよびよと草の中からとび出してびくのそばへかけつけびくの中の魚をつかみだしてははりきりあみのかかっている所より下手の川の中をめぐらしてははんばんなげこんだ。	
ごん	P62	△ある秋に二三日雨が降り続いた。その間あなの中にしやがんでいた。△雨があがるとごんはあなからはい出した。△ごんは村の小川のつづみまを出てきて川下の方へとぬかるみ道を歩いて行った。△川の中に人がいて何かやっている。ごんは見つからないようにそうつと草の深いところへ歩きよってそこからじつとのぞいてみた。○(兵十だな。)	
ごん	P61	△あなをほってすんでいる。△夜でも昼でも辺りの村へ出てきていたずらばかりする。△畑へ入っていてもほりちらしたりなたねがらのほりちらしたりのへ火をつけたり百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしりとつたりする。	
ごん	P60(1)	△中山から少しはなれた山の△一人はつちの小さきつね△しだのいっばいしげった森の中	
ごん	P68	○兵十のおっかあは、どこにいったかきつねが食べたというにちがいない。それで兵十がはりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらしてうなぎを取ってきってしまった。だから兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい。うなぎが食べたいと思ひながら死んだらう。ちよつ、あんないたずらしなけりゃよかった。	
ごん	P67	△おれがすぎるとごんは、村の墓地へ行って六じぞうさんのおかげにかくれていた。△ごんはのびあがつて見た。○ははん、死んだのは兵十のおっかあだ。	
ごん	P66(2)	○うなぎにまきつかれたとききつて苦しかった。△ごんが弥助という百姓のうらを通りかかった。○ふん、村に何かあるんだな。何だろう。秋祭りかな。祭りならたいこやふえの音がしそうなものだ。それに第一お宮にのほりが立つはずだ。△いつのまにか表に赤い井戸のある兵十のうちの前へ来た。	
ごん	P66(1)	○うなぎにまきつかれたとききつて苦しかった。△ごんが弥助という百姓のうらを通りかかった。○ふん、村に何かあるんだな。何だろう。秋祭りかな。祭りならたいこやふえの音がしそうなものだ。それに第一お宮にのほりが立つはずだ。△いつのまにか表に赤い井戸のある兵十のうちの前へ来た。	
ごん	P65	○うなぎにまきつかれたとききつて苦しかった。△ごんが弥助という百姓のうらを通りかかった。○ふん、村に何かあるんだな。何だろう。秋祭りかな。祭りならたいこやふえの音がしそうなものだ。それに第一お宮にのほりが立つはずだ。△いつのまにか表に赤い井戸のある兵十のうちの前へ来た。	

㊦ めあての解決、自己の読み

私は、はじめ、ごんはいたずらぎつねだと思っていました。でも、読んでいくうちに、ごんが、本当はやさしいきつねだと思いました。本当は、さみしいからみんなにいたずらばかりしたのだと思います。ごんが、心をいれかえたところに私は、感動しました。

最後に打たれて死ぬところは、いちばん悲しく問題を持たせてくれたのかもしれませんが。

兵十は、こうかいをし、もっとよくよく確かめれば、自分の性格がいやになったと思います。ごんは、これでいいんだ、いたずらばかりしていたのが悪かったんだと思ったと思います。ごんは、自分を打った兵十をゆるしたと思います。そして、兵十も一生ごんを打ったことをこうかいすると思います。

㊧ めあてをふり返って

私は、はじめ読んだとき、

ごんは、本当はやさしいきつねなのに、どうしていたずらばかりしていたのだろう。

という疑問を持ちました。そして、二回目に読むとわかりました。ごんは、さみしいから村の人たちに、なんとかして相手にしてもらいたいのだなと思いました。

〇男の学習

㊦ 初めの感想

ごん	ぼくもあんないたずらがしてみたい。 ごんは、兵十の母さんがなくなったのが、見ただけでよくわかったなあ。	兵十	お母さんがなくなってとてもかわいそう だ。 くりは、おいしかったのだろうか。
----	--	----	--

① 自分のめあて

なぜ、一人ぼっちの小ぎつねになったのだろう。親にすてられたのか。

㊧ ひとり調べ・ひとり読み

㊦ 自己の読み・まとめ

No.	Text	Text	Text	Text	Text	まとめ
74	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	73	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	72	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
71	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	70	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	69	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
68	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	67	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	66	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
65	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	64	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	63	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
62	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	61	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	60	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
59	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	58	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	57	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
56	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	55	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	54	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
53	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	52	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	51	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
50	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	49	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	48	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
47	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	46	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	45	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
44	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	43	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	42	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
41	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	40	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	39	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
38	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	37	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	36	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
35	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	34	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	33	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
32	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	31	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	30	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
29	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	28	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	27	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
26	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	25	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	24	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
23	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	22	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	21	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
20	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	19	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	18	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
17	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	16	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	15	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
14	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	13	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	12	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
11	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	10	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	9	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
8	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	7	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	6	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	ごん
5	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	4	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	3	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	
2	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」	1	○「おっかあが死んでからは、だれがしんがおれに、くりやまつたけなんかを、毎日目くれるんだよ。」			まとめ

㊧ めあてをふり返って

なぜ、ごんは一人ぼっちの小ぎつねになったのだろう。親にすてられたのか。

という疑問を持ったけど、教科書のごんぎつねを最初から最後まで読んでもぜんぜんわかりませんでした。ひとり読みでは、ごんと兵十の行動を書き出しました。

兵十はくりりに気づくのがおそかったと思います。いつもくりやまつたけをくれたごんを打って、兵十は不幸者だと思います。

S子は、ごんのやさしさに気づいたため、なぜ、いたずらをするのか疑問を持った。二度目の読みで答えを見つけ出したので、最後のクライマックスに目が移っている。断片的な感想から、こだわりを持って読み深めた結果、価値あるめあてにつながっているのではなからうか。

〇男は、自分の経験からか、「なぜ、一人ぼっちの小ぎつねになったのか。」に心をひかれていた。想像しか手がないので、「全然分かりませんでした。」という答えになった。だが、ひとり読みでは、ごんと兵十の行動や考え方の移り変わりを読み取り、共通のめあては解決するに致っている。

⑦ めあての見直し

共通のめあてに至るまでの個々の興味・関心や、共通のめあて追求場面における発想は大切に、できるだけ認めていくべきである。だが、授業におけるめあては、共通なものであるはずである。教師のねらいをそのまま授業で追うのではなく、指導の過程で児童に自分で見つけたものという意識を持たせることが大切である。共通のめあてを解決していく過程、あるいはその結果、自分のめあての位置付けを確認させると、学習のしかたやよりよい視点が見えてくる。指導過程にめあての見直しを位置付けることにより、次の単元において「めあてを追求する」姿勢が引き継がれると考える。

途中で使用しためあてカードを感想文に取り入れたものを右にのせる。(資料1)

3. 考察とまとめ

初めの感想からめあてを作ると、わからないことが中心になる。ひとり調べをしていると、新たに疑問を感じることもある。また、ある子には理解できても、他の子にはわからないこともある。みんなに考えさせたいめあてもある。伏線にめあてを見い出し、主題に迫ることができるのは、「かわいそうなごん」を見てもわかる。「なぜ、かまどで焼いたのか。」と「むかしの

かわいそうなごん

I 子

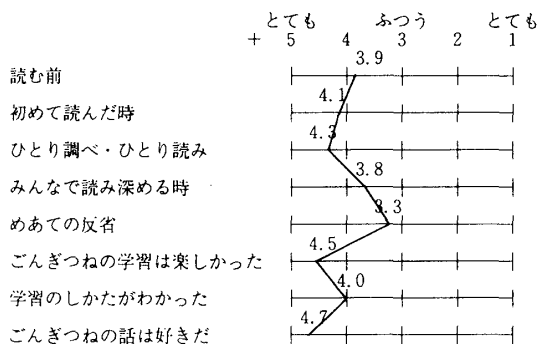
私は、この「ごんぎつね」の七十九ページをよんで、どうしてたしかめないで兵十はごんをうったのだらうか。と、思いました。この「ごんぎつね」を勉強していたら、どうして兵十がごんをうったのかということが少しづつわかってきました。

ごんはうなぎのつぐないにくりやまつたけを毎日もっていつていることを兵十はわかっていた。兵十はてっきりごんがまたいたずらをしに来ていると思つて、兵十は火なわじゅうでごんをドンとうちました。私は少し、「ごんがかわいそうだな。」と思つた。でも、「ごんだけがかわいそうではなく、兵十もかわいそうだな。」と思つました。

私は、ごんが毎日毎日うなぎのつぐないにくりやまつたけをもつていつた。というところで、「ごんはやさしいきつねなんだなあ。」と思つました。

人は、なぜ、〇〇助や〇〇兵衛とつくのか。」をめあてにしていた子は、めあての見直しによって、ごんと兵十に目を向け、主題にかかわる感想文を書いた。一人ひとりが学習のしかたを身につけ、修正を加えながら自分自身の読みをつくっていくことが望ましい。

表2 学習をふり返っての児童意識



4. 今後の課題

発表やノートなどから、一語句の意味がわかっていないのではないかと感じることもある。正しく読めないのに、めあてを作れと言われしかたなく作っている場合もあるようである。どの子もすらすら音読できるという一つの基本を身につけるには、活動を保障しなければならない。一単位時間に位置づける、群読して自信をつけさせる、個別指導をするなどの工夫が必要である。自分の読みや考えがまちがっていることが認められ、まちがいを直しながら高まりあう「国語教室」づくりをめざしたいと考えている。

表2は、学習後意欲について自己評価させたものである。ひとり読みの時に数値が高くなり、意欲的に取り組んだことがわかる。全体で読み深める時は、正しいと思った読みを心ならずも修正しなければならないという意識が影響したものと思われる。めあての反省時も、物語から離れた学習であることが数値に表れている。最高値は、物語自体の魅力にあると思われる。価値ある教材が意欲を高めることは、言うまでもない。